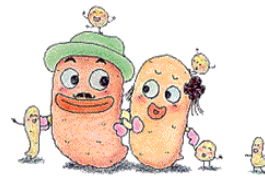


湯戸飛夜いけいけだよ



Jinen Joe family

記事:

- ・日帰り温泉「湯や晴ル音（ゆやはるね）」4月1日オープン
- ・連載小説『男でござる 新説天野屋利兵衛』あとがき
- ・湯や晴ル音 4月1日オープン
- ・今後の行事予定

会員募集中

あなたも「西徳山まちづくりの会」で一緒に活動しませんか。会では、常時、会員を募集しています。

E-mail :
nishitokuyamamatizuk
urinokai@gmail.com

発行 西徳山まちづくりの会

日帰り温泉「湯や晴ル音（ゆやはるね）」
4月1日 オープン

晴ル音

令和4年3月末で廃止された、「国民宿舎湯野荘」が、日帰り温泉施設に生まれ変わり、4月1日にオープンしました。

3月14日にわが会のスットココンビが「一般社団法人おいでませ湯野」代表理事の西田宏次朗さん（紫水園社長）をインタビューしました。

施設の名前の由来は

「晴ル」は温泉の湯を「張る」をもじり、「音」は、湯張りの音や自然の動植物の音色が聞こえてくるような静かな湯屋の風景。軽やかで、優しく、晴れやかに広がる音をイメージした言葉遊びです。

「一般社団法人おいでませ湯野」の設立経緯を教えてください

晴ル音にお客さんが集まっていたら利益が出れば地域に還元していいという考えで一般社団法人を設立しました。2年3年経ってうまいこと回っていったら、例えばイベントをやる時にお金がないということなら、一般社団法人からお金を出すという形で、地域活性にもつなげていけたらなという思いです。理事は7人で、社員はまた別にいます。パートさんとか。

オープンに向けてどのようなご苦労がありますか

やっぱり資金がなかったというのが大きいですね。湯野荘を無償で譲渡して頂いたんですが、旧くてリフォームして使えるような感じではなかったんです。2億円位の事業規模だったんですが、1億2千万円位は周南市と国の補助金、あと7千万円は自己資金という形で調達して今の施設ができました。資金面でクラウドファンディングを利用したりと資金を集めるということが大変でした。

施設のコネクトは

この施設自体が地域の発展と観光の発展拠点としてうまい具合に活用していただけたらなと感じています。地域の人であれ、観光の人であれ、集まる拠点としてこの施設が運営できたらなと思っています。

(4面に続きます)

湯や晴ル音HP <https://www.yuya-harune.com>

連載小説

『男でござる 新説天野屋利兵衛』

あとがき 文城山 耕作

以前、椿峠に、天野屋という和風レストランがあり、観光バスが食事に寄ったりして、多くの客で賑わったことがある。十二月十四日の赤穂浪士の討ち入りの日には討ち入りそばなるものを食べに行った記憶がある。

なぜ、この地に天野屋なのか。それは近くの四郎谷に天野屋利兵衛の墓があるからというものだった。

その後、まちづくりの会の活動の一環で、故郷の歴史を知ろうということになり、天野屋利兵衛誕生地の石碑を訪れた。なんと立派なもので、裏面には七言絶句で利兵衛の功績が刻んである。

また、西徳山農事放送電話農協編集のふるさと物語によると、

「天野屋利兵衛の父親は神村将監といって、かつては禄千石を食んだ毛利家支藩徳山藩の家老職であった。ある日将監が富田川を騎馬で渡ったところ、折悪しく川下で釣りをしていた若殿の怒りを買った。将監は家老職を辞し、浪人となって四郎谷に移り住んで、里の娘マンを後妻にめとり一子喜兵衛をもうけた。その喜兵衛がのちに大阪に出て商人になり、天野屋に婿入りし、義商天野屋利兵衛になった」という。

そもそも天野屋利兵衛とはいかなる人物なのか。実在はしたのか。実在し

たとしても、四郎谷が誕生地であることは本当なのか。忠臣蔵の義商として働いた人物と一致しているのか。疑問が次々と湧いてきた。

忠臣蔵という一連の事件が起きる前の時代背景とはいかなるものであったのか。まずそこからひも解くことにした。

忠臣蔵の一連の事件が起こったのが元禄十四年から十五年にかけてということなので、西暦でいうと千七百一一年から千七百一二年ということになる。神村将監なる人物とその子喜兵衛が四郎谷にいた時期とは、すなわち千六百年代の後半である。

先ず神村将監は実在したのか、本当に家老職であったのかを調べた。徳山市史の一六〇〇年代を読み込んだ。

関ヶ原の戦いで敗れた西軍の大將、毛利輝元は中国地方の支配から防長二州にふうじこめられ、萩の本藩を長男に託し、次男の就隆には分家として徳山藩を分け与えたとある。

神村将監という名前は確かに実在した。どうやら分家するとき、萩の本藩からお目付け役として送られてきたらしい。もちろん役職は家老である。実は家老は二人体制であったそうだ。一人は桂某というひとで、こちらは徳山藩の地下の家老であった。神村将監は主に萩とのつなぎ役など外交を担い、桂某は内政を担当したと思われる。

それまで下松にあった屋敷を徳山に移し、改めて徳山藩と称したのが一六五〇年なので、その時家老二人体制を

布き、その一翼を神村将監が担ったということならば、時代的にも納得がいく。

次に若殿が富田川で釣りをしていた時、知らずに乗馬のまま川を渡った将監が、若殿の怒りに触れて失脚し、浪人として四郎谷に移り住んだというのは事実かどうか。

結論から言うと、これは事実ではない。だが、神村将監が失脚したというのは真実である。

ことは三代藩主のお世継ぎに端を発する。

初代藩主就隆の実子は、高齢でできた子であり、しかも病弱であった。初代亡き後、幼くして二代目に就任したが、病気のため間もなく早逝。そこで三代目の候補に挙がったのが、やはり初代就隆の子の元次。元次は側室の子である。そこで論争になったのである。

有能であるならば側室の子であろうと構わないという一派と、それなりの血筋の者を養子として迎えるべきだとする一派に意見は分断されたのであった。結果は側室の子である元次が三代目を継ぐことになったのである。

そうすると反対の側に付いた頭目の神村将監ははじめをつけるために、家老の職を辞し、浪人となったというのがどうも事実らしい。

いつの時代でも、またどの藩でも起こりうる跡目相続の争いがきっかけとなったということだ。

それでは四郎谷に移り住んで、里の

娘マンと一緒にになり、ひとり息子の喜兵衛をもうけたというのは伝説として残っているということは信じるしかないのだが、詳細は分かりかねる。

喜兵衛が四郎谷を出て、商人になったのか。ここからは想像の世界であり、まさにフィクションそのものである。ただ、四郎谷の公民館で見たことがある一枚の写真が手掛かりになった。それは四郎谷の入江に風待ちに寄ったのであろう多くの帆船の姿であった。写真が撮られた時期と喜兵衛が商人を目指した時代は時代が大きく異なるのであるが、四郎谷という所が時代を超えて風待ちの入江だったというのは厳然たる事実であろう。

また喜兵衛が少年だった丁度その時代は、江戸に徳川幕府ができて半世紀以上経って、江戸の町がいよいよ賑やかになっていく。人が集まれば食料やその他の物資が大量に必要になってくる。そのうえ、江戸では明暦の大火など頻りに火事が起こって、材木の需要も増したのである。

日本海側の山形や秋田の天領でできた米を江戸まで運ばなければならぬ。陸路で運べば馬車でもたかが知れている。舟運なら一度にたくさん米が運ぶことができる。たとえそれが遠回りになろうとも。というので日本海を南下し、関門海峡を通過し、瀬戸内海を東進して大阪まで行く。さらには太平洋の沿岸を東へ進み江戸まで運ぶ、西廻り航路が江戸の商人河村瑞賢によって開発された。おそらく瀬戸内海は想像を絶するような船便が往来したであろう。さてその河

村瑞賢であるが、その出自は伊勢の荷車引きであったといわれる。それが一代で幕府からの依頼で航路の開発や银山開発、河川改良などの大プロジェクトを請け負う大商人になったのである。河村瑞賢という名前は地方でも知らぬ者はいなかったであろう。そこで、喜兵衛は河村瑞賢に憧れて商人を目指すと設定にした。

時は流れ、天野屋の養子になった喜兵衛であるが、そこまでの経緯はすべて創造の裡である。

ではなぜ赤穂浪士の吉良邸への討ち入りに備えて、天野屋利兵衛がそんなにも経済的支援をしたのか。赤穂藩といえは塩の専売でかなりの利益を得ていた。その塩の舟運を天野屋が請け負っていたのではないかと推測が成り立つ。

藩主浅野内匠頭が殿中で刃傷沙汰を起こしてから、赤穂藩はお取り潰しになるのだが、長年の取引に恩義を感じて経済的支援をする。そこが天野屋利兵衛の義商と呼ばれる所以である。

最後に筆者は高輪泉岳寺を訪れた。曹洞宗泉岳寺は浅野家の菩提寺である。内匠頭長矩と阿久里夫人の墓をはじめ、大石内蔵助以下四十七士の墓が浅野家の門内にあり、一日中線香の煙が絶えることはない。

その門外にひとときわ大きい石碑がある。それには天野屋利兵衛浮図と刻んである。浮図とは墓のことである。帰り際に線香を販売している墓守の女性が「どちらからお見えですか。」

というので、
「天野屋利兵衛の誕生の地の山口県周南市からです。」と答えると、「あの人は謎の多い人ですから…」と言った。

参考資料

- 徳山市史
- ふるさと物語
- 西徳山農事放送電話農協
- 新・忠臣蔵一々八 舟橋聖一著 文春文庫
- 日本の歴史十六 元禄時代 中央公論社
- 忠臣蔵とは何か 丸谷才一著 講談社
- 江戸を造った男 伊藤潤著 朝日文庫



天野屋利兵衛浮図
(高輪泉岳寺)



天野屋利兵衛誕生の碑
(戸田四郎谷)

湯や晴ル音 4月1日オープン

編集後記

戸田駅が建て替わるといふ。建物自体が古くて、耐震的にも不十分ということだ。

現在の駅舎は1911年の戸田駅開設以来のもので、年数だけでも113年経っていて、かなりの年代物である

年代ものであるからこそもったいないような気もする。別れを惜しむのは筆者だけであろうか。

駅舎は数々の別れや出会いを見てきたであろう。多くの人が通勤や通学で利用した。駅長がいて、駅員もいた。切符売り場もあり、売店もあった。

ある時からまちづくりの会と称する人たちが、いけいけフェスタというイベントを開催して、大いに賑わった。何年続いたであろう。

今では駅前花壇で花づくりをしている。こうして歴史は刻んでいく。戸田駅113年の歴史の中で、まちづくりの会の関与がもうすぐ30年になる。

発行責任者

会長 神本康雅
広報部長 木曾裕子

西徳山まちづくりの会

ホームページURL:

nishitokuyama.web.fc2.com

今後の目標は

今年の7月か8月には芳山園さんの新しい入浴施設ができるんですよ。そうすると、第1弾としては例えばこの湯や晴ル音を頂点として、紫水園のお客さんとか芳山園のお客さんが、どこのお風呂にも入れますよという形にすると、まずはある程度交流人数が回るんですよ。今度は、晴ル音にいられたお客さんも、利用レシートを持ってこられたら紫水園の食事が何パーセント割引で食べれるとか、今、やまいもまつりさんもレストランを始められたし、蕎麦 b'sb-an (ベーズベーアン) さんとかもあるので。湯や晴ル音にはカフェスペースはありますが食事は出さないの、ちゃんとした食事の場合は各お店に行っねという形で案内するんです。だからあそこを中心に町の賑わいも創出したいなという思いもあります。そうすると人の流れもできてくるので、今度は、お店をやってみようという人も出てくるんじゃないかなと思います。土日だけでも出してみようかなという人が。あくまでもスタートなので、どんどん交流人口を増やすというのがイメージです。返済と給料を支払ったら儲けはないと思いますけども、それでもやる意味はあるかなと。人が集まりやすい建物なので。ただ、お客さんを引っ張ってくるためにはどうしても行政の力が必要なんですよ。行政の協力を得るには実績を作らないといけないという部分があるので、交流人口が増えて、湯野にあんなに人が集まるのならと行政も動きだすんですよ。これだけの交流人口があるんですよというデータにまとめて市に投げて、市にもう少しここに投資してくれんじやろうかと。人が歩いて道は悪い、橋はぼろいじやあ納得がいけないので。例えばサンサンロードを整備するお金をくれとか。最初は湯野公園とこの晴ル音をつなぎたいんですよ。あそこに子供さんが遊べる施設とかドッグランができれば、あそこで遊んで、じゃあ、お風呂に入りに行こうかという流れができるので。これは行政の力を借りないと、僕らの力じゃどうしても限界があるのでね。今度、滞留人口とか交流人口の統計調査をする予定にもなっています。

お話を伺った後、施設を案内していただきました。古い建物が撤去され、古臭い景色がポップに変わっています。管理棟と入浴棟の間には芝生広場があり、小川が流れています。



管理等と入浴棟との通路



駐車場からの遠景

今後の行事予定

戸田駅前広場周辺の清掃

毎月第2、第4土曜日の15時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。お手伝いしていただける方、大歓迎です。